
Cafe*Noel

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cafe*Noel

【コード】

N0092M

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

殺伐とした街中に、ひっそりとした佇まいの落ち着いたカフェがある。

店内は、ほんの少し薄暗くあたりにはコーヒーのほろ苦い香りが漂い奥からは、菓子の甘い香りが漂ってくる。

2・3席個室があり、4・5席オープンテーブルがある
手入れの行き届いた季節の花々の咲き誇る中庭に出ると、テラスがありそこにも、4・5席用意されていた。

マスターは面長のいつもかすかに微笑んでいるかのように見える瞳が印象的な細身の男性。

店員は、2人。年の割には物腰の落ち着いた感じのいい男性が静かに迎え入れてくれる。

ここはそんなカフェに足を運んだ人たちの刹那の物語

オリジナル創作サイト『Happy recipe』より。

一部見直して転載しています。

一話完結つばい造りになっておりますので何処からでも大丈夫です。

第0話：C a f e * N o i e

なんていうか、絶対そこにあるわけじゃないんだよね

毎日通る道だもの。

別に躍起になって探していたわけでもないけど、見落とすわけもないじゃない？

「あつた…」

そしてその日は丁度なんとなく目に留まってしまったわけだけども、まるでずっと昔から当然のようにそこにあつてそこで私を待っていたような気にすらさせられる…そんな店だった。

レンガ造りの外壁に蔦が這い、アンティークな外観を際立たせている。

私の出した独り言なんて遊歩道行きかう人々が気に留めることなく流れもかわらない。

私は最初からそこが目的地だったかのように自然とその店に足を進め扉を押した。

懐かしさすら感じさせる木製のウェルカムベルがカラコロと愛らしい音を奏で迎え入れてくれる。

どのくらいぶりだろう？

本当に久しぶりにその扉をくぐった。

足を踏み入れると暖かなオレンジ色のランプの明かりが店全体を柔らかに灯している。

「いらつしやいませ」

耳に心地よい柔らかな声をかけてくれるのは、物腰の穏やかな30代前半。ぐらいだろうか？落ち着いた雰囲気がそう見せるだけかもしれない。

すらりと長身で細身の男性。

几帳面にアイロンのかかった白いシャツに黒いズボン。腰には同色のカフェエプロンといういつもの出で立ちでカウンターへと入るところだったようだ。

ベルの音に身体ごと振り返って軽く腰を折る。続けて「こちらへどうぞ」と繋いだ後自分もカウンターへと戻った。

「随分と久しぶりですね。アリスさん」

アリスと呼ばれた彼女は誘われるままカウンターまで歩み寄り中央よりの席に腰を下ろす。

手荷物で隣の席を占領し、ふう…と一息ついたが店主の言葉に顔をあげた。

「ええ、久しぶり。マスターはよく覚えてるのね？本当に久しぶりなのに…」

心底驚いた。という風に可愛らしく丸い瞳を見開いたアリスに店主はにっこりと柔らかな笑顔のまま頷いた。

「ごういう仕事をしていると、顔を覚えるのは得意になるものなんですよ」

「まあ、お客も少ないものね？」

遠慮という言葉を知らない風にアリスは静かな店内を見回してくす

くすと悪戯な笑みを浮かべて肩を竦めた。
そんなアリスに気分を害した様子もなく「いつも通りです」と答える。

店内は確かに静かだった。

天井で回っているシーリングファンの音でも降ってきそうだが、アンティークな家具で統一された洋風な室内はそう広くはなく、入って右手にレンガを積み上げた壁で仕切られた個室が3つ。オープンスペースに4人掛けのテーブルが3つ低いパーティションを挟んでもう3つ。

奥には季節の花で彩られたテラスに円卓が2つ　そこへ続く壁はガラス張りになっているため、店内からでも十分に庭を愛でることは可能だ。

あとは、このカウンターに丸椅子が4つ。それだけだ。

「あ、いい香り」

アリスが店内を見回している間に店主はミルクパンを火にかけていた。
いつの間におかれていたのか、目の前にはまん丸の氷が3つ浮かんだグラスに暖かなお絞りも並んでいた。

此処には何度も足を運んでいるアリスだったが考えてみると一度も注文したことがないような気がする。もちろん最初はメニューもあった。しかし店主の薦めるもので領いてきた為次第に開くこともなくなかった。

今では渡されることもない。

「ロイヤルミルクティー？」

「ええ、とても甘く…と思っています」

そう、と店主の言葉にアリスは頷いた。不思議と彼の用意するものに不満を持ったことはなかった。壁にかかった柱時計がボン…ボン…と時を告げる。どうぞ。と華奢なカップがカウンターからそつと出されカチャリ…と軽い音を立てた。ふわりと立ち上った湯気に柔らかなアールグレイの紅茶の香りが自然と彼女に深呼吸させる。

奥のキッチンから甘い香りと共に転院がアリスの元へ小さな籠に入ったクッキーを運んできた。

「シナモンクッキーとアーモンドクッキーです。焼き立てですからまだ暖かいですよ」

気をつけてと締めくくり、にっこりと陽だまりのような笑顔を零した。

店にはこの店員 確か優といった。とカウンターの内側を定位置にしている店主。そして、もう一人この二人とは違うタイプの店員がいる。

「マスター！大変だ！」

ゆつたりとした空間に慌しい声が割り込んできた。間違えるはずはない。最後の一人の店員だ。

アリスはその声と共に庭のほうから飛び込んできた彼に方を跳ね上げご指名を受けた店主は少し呆れたように溜息をついた。素直に注意を促したのは彼の相方だ。

「克己。お客様の前だよ、騒がないで」

克己と呼ばれた彼は、優にそう注意を受けて初めてアリスの存在に気がついたとばかりに足を止め優の言葉に不機嫌そうな色をしていた切れ長の形の良い瞳は、申し訳なさそうに移ろぐ。そして「…わりい」と軽く謝罪を述べた。アリスは彼の行動には鳴れたものだとばかりにさして気にもしなかった。それよりも気になったのは…。

「それで、克己くん。何が大変なんですか？」

「鳥が落ちてたんだ！」

「…ああ、また何か拾ってきたんですか？」

「どこで捕まえたの？普通、落ちてるって言わな…い」

客の手前カウンターまで歩み寄るのを躊躇していた克己の傍へ足を進めた優は「どうしよう」と両手で抱きかかえている彼の腕の中を見て語尾が消えた。

「生きてる？」

恐る恐る手を伸ばして、鳩ほどの大きさの鳥をそつと撫でる。暖かいような気はするが克己の体温なのかその鳥の体温なのか全く分からない。

「生きてるって。でも何か飛べないみたいで…」

「怪我はしていないんですか？」

どうしたものかと思守っていたアリスに一言詫びて、店主はカウンターを抜け出した。

「とりあえず、バスケットにブランケットを敷いて、怪我の箇所を確認しましょう？ほら、克己くん。大丈夫ですから、そんな顔し

ないで」

店主の話の途中で意を解した優は足早に店の奥へと引っ込んだ。その姿を見送った後、店主は克己の背中を軽く叩く。顔は仕方ないなと苦笑していたが飲食店内に動物を持ち込んだということは責めてはいないようだ。

彼はもちろんカフェの店主であって、動物医ではない。

しかし、用意されたふかふかのバスケットの中で丸くなった鳥に躊躇なく手を伸ばし、男性にしておくのは勿体無いくらいの綺麗な指先で軽く腹などを押した後「大丈夫でしょう」と頷いた。

「飛べないのは羽がまばらになってしまっているからのようですし、その為いきつと余計な体力を消耗して今はぐったりとしているのだと思いますよ。外傷もないようですし」

確かに彼の手でそっと伸ばされた翼はジグザグでこれでは風の抵抗がうまく受け止められないだろう。

「どうするの?」

暫くそのやりとり眺めていたアリスだったが何気なく口を挟んだ。

「ここで暫く休んでもらいますよ。あまり混んだ店ではありませんからね?」

につこりと笑顔でそう答えた店主にアリスは気にしていたのかと苦い思いをしたが「それがいいわね」と愛想笑いを浮かべた。それに続いた「くー…」とけだるそうに少しだけ頭を持ち上げた鳥の鳴き声は相槌のように聞こえた。

「おい、あんだ。何か鳴った」

ようやく落ち着きを取り戻した店内でカップを傾けたアリスに、鳥の納まったバスケットを大事そうに両腕で抱え込んだ克己が擦違ひ様にそう告げて奥へと消えていく。

え？と、隣の席を占領していたバッグを覗き込む。

慌てた様子で中を引っ掻き回し取り出したのは懐中時計だ。かなりの年代ものに見えるそれは克己の言うとおり、りりりり…とねじの外れたような音を立てていた。

アリスは音を止めた後も暫くそれを眺めていたが、軽く左右に首を振って元の場所へとしまいこんだ。

「マスター…」

ハートの女王は煩くて敵わない。

溜息と共に軽く肩を落としたアリスの声にカウンター越しでグラスを磨いていた店主は「はい」と答えた。

アリスは目の前のカップを空にしてもう一度嘆息すると意を決したように席を立った。

「帰るわ」

代金を精算し扉のノブに手を掛けたところで声を掛けられた。アリスはこれからまた忙しくなるなと気落ちしたまま声のした方を肩越しに振り返った。

につこりと歩み寄ってきた優が、折角だからとクツキーの下敷きになつていたペーパーの四隅を合わせてリボンを掛け。簡易的なラッピングをしたものをアリスの手のひらにそつと乗せて握らせる。

アリスは手の中の物と「どうぞ」と言葉を重ねた彼の顔を交互に見た後「ありがとう」という言葉と共に笑顔が零れた。

迎え入れてくれたときと同じようにウェルカムベルが可愛らしい音を立てる。

「またいつでもどうぞ」

優しく背中を押すようにかけられる言葉が、なんとも言えず暖かく嬉しかった。

第1話：倦怠期

ふう……

もう、別段問題も無いのだけど、何となく私はため息を吐いた。今日の喧嘩の理由はなんだったっけ？
くだらなさ過ぎて忘れた。

私は、ことりつと正面に置かれた、アイスココア（疲れるとどうしても身体が甘い物を欲しがるとだから仕方ない。）の生クリームをスプーンでぐりぐりと遊んでいたが、それにも飽きて、スプーンをグラスの底にそつと沈めた。

ふう……

私は再び、ため息をつき、タバコに火をつけて深く吸い込んだ。別においしいと思って口にしてるわけでもないんだけど……何となくやめられない習慣。

一人でこうやって、カフェでぼんやりしていると、いろいろと考えも纏まる。

あの時……私が何が言いたかったのかも思い出せそうな気がする。

「変なの」

私は誰にも聞こえないくらい小さな声でぼつりと呟いた。

あいつとは些細なことで喧嘩する事もある……と言うか、最近は頻繁にあるような気がする。

『倦怠期』私の中で一つの言葉が頭をよぎった。

そうかもね。

大して、理由も無く納得する。

別に私は私だし、あいつはあいつだ。

本当に、今日は何で言い争いをしたんだっけ……え、言い争い？

いや、あれではほとんど、言われ放題だな。

私は思わず自嘲気味に微笑んだ。

「だから、全部俺が悪いつていうの catt?！」

誰もそんなことは言っていない。

「黙つてても、分からないだろう！何とか言えよ！」

そんなに捲くし立てないでよ。

私の悪い癖。

こうやって、落ち着くと何だかたくさん言葉の整理がつく……でも返答を迫られると……頭の中が真っ白になる。

私、今何考えてたんだっけ？問われて初めて自問する。

真っ白な頭で考えることは何も無い。

「別に」

そして、それは決して自答までは至らない。小さく答えた私の返答が、気に入らないのだろう。再び荒々しく「言いたいことがあるなら言え！」と攻め立てる。

私、ダメなんだ。そう責められると本当に、頭の中が真っ白になって、浮かんでは消えることは全く関係ないことになってしまつ。

今日の夕飯のこととかね。

ちらりと頭をよぎってもそんなこと、口にできない。

私はあいつの考えることを、長年の経験と付き合いで、ある程度予測することができる。

だからこそ、口に出していえないことが、一つ一つ増えていって選んでると

「何も言いたいことはない」

と言う判断に行き着いてしまって、その私の答えは再びあいつの逆鱗に触れる。またまた、私の頭は何も纏まらなくなる…そして、零れだす…溢れだす。

涙…涙…涙……

嗚呼。

このときが、一番自分が情けないと思う。感情ばかり高ぶって、言葉が出ない。

できることなら、声に出さなくても私の声を読み取って欲しいと願う。

「泣いてても分からない！」

結局、突き放されてしまう。

こういうときに本当に欲しいのは、こんな情けない私を包む暖かな手と……柔らかな時間。

私はいつもこの時間に飢えていた。

一生気がついてもらえないだろうな。

いつも思う。私の底の方に眠る、子供以上に甘えた感情。

あいつは気がつかない。30センチほど離れた距離がやけに遠い。

言いたいことは何もない。あんたを傷つけるつもりは全く無い。

そう思っただけで伸ばし掴んだ手も、決して握り返されることはない。触れているのに、とても冷たく人肌は金属のように感じる。

あいつも何も言わない、言えない私に耐えている。

「切ないな……」

もう少しで落ちそうになる、灰を静かに落とすべき場所に落としてふー……っと紫煙を上げる。

ブウウウ……ブウウウ……

テーブルの隅に置かれていた携帯が一人で震えている。

受信メール1件

『今日は悪かった。言い過ぎた、もっと素直に話して欲しかっただけだったんだけど、結局傷つけた。ごめん。』

ごめん。か

別に謝って欲しかったわけじゃない、私としては何もいえなくなる私の心を分かって欲しかっただけ掴んだ手を握り返して欲しかっただけ。

……ってそんなこと分かる奴いるわけないな。

自分でふと思ったことに自嘲気味な笑みが浮かぶ、ぐいと灰皿に手の中の物を折り入れた。

カラカラ。

ココアのスプーンをもう一度手に取り、水と分離し始めて二層に分かれた液体を残り僅かな氷の音を楽しむようにかき混ぜて私は一気に飲み干した。

甘い。

無性に甘く感じたココアに文句を言うように顔をしかめた。相変わらず、私ってば一人で空回りしてるみたいだ。別れたいというなら、それもいいと思った。

そう思っていたのに、あいつはもう少し、こんな私と居たいらしい。

「馬鹿な奴」

ぽつりと呟いて、静かに私は席を立った。

薄暗い店内から外にでると、小雨がぱらついていた。

私はバツクに潜ませた折りたたみ傘に触れたが、取り出すことはなかった。

灰色の雲の隙間から、僅かに明るい空の色を感じて、私は僅かに口角をあげた。そして雨の降る街道へ足を踏み出した。

私はこれからきつと……勝手に怒って勝手に反省している、あいつのところへ

また、帰るんだろう

第2話：リボンの少女

……カラン……

いつもより短めのベルが扉の開閉を告げる。

すぐにぴったりとしまっってしまう扉から滑るように入店してくるのは赤いリボンが愛らしいシシィだ。

シシィはリボンと綺麗に梳き整えられた艶の良い髪を靡かせて颯爽とカウンターまで歩みを進める。

「こんにちは、いつものですか？」

彼女の来店は初めてではないらしい。

店主はにっこりと笑みを濃くしてカウンター越しに声をかける。シシィはそんな店主の声に不機嫌そうな顔をして肩をちよっと竦めよじ登るようにカウンターの椅子に腰掛けた。

「このブレンドでないとダメらしいわ」

だったら自分で買いに来ればいいのよね。頼まれたお使いがよほど気に入らないのか、小さく息をついて持ち寄った籠をカウンターに載せた。

店主はいつも通りに籠から小さなメモを取り出して確認するように軽く首を上下させる。

「気に入っていただいているようでよかったです。シシィさんはそつでもないご様子ですが」

「あら、誰も嫌いだ何て言っていないわ」

つんつと高飛車な物言いですわいって顎を上げる。きちんと切りそろえられた髪がその動作にあわせてふわりと揺れ元の位置に戻った。

「それは良かった。よほどここがお嫌いなのかと…」

シシイの様子に苦笑してそう告げた店主にシシイは本当に驚いたように目を丸めて長い睫を瞬かせた。

「まさか！私はここへしかお使いに何て来ないわ」

続けていつもの頂戴と締めくくったシシイに店主は軽く頷いてミルクパンを火にかけた。

「温めにね？」

「いつも通りで」

壁にかかった古時計の振り子の音が静かに時を刻む。

カフェオレポウルに注がれたのは真っ白なホットミルク。ふわりと柔らかな湯気がシシイの鼻先を撫でていく。

ちろりと舌先で表面を舐めて温度を確認し頷くと、嬉々としてポウルの中身を飲み干し始める。

その様子に店主も口角を上げて暫く見守った後、思い出したように背にしていた棚から二種類の珈琲豆の袋を下ろした。手馴れた調子で店主が見るを引く音に黙って耳を傾け、じっと見つめ始めていたシシイはミルクを飲み終えていた。

きゅつと彼女が持参した籠に入っていた便に引き立ての珈琲を入れて密封する。いつもの量だ。そして、それには辺りの穏やかな空気も一緒に封じられた様な気がしてシシイは満足気に頷いた。

暇を告げようとシシイが腰を上げたところで、テラスへと続く扉が

開いた。片腕にバスケットを抱き、反対の手には雑巾を持っている。庭のそうでもしていたのだらう、克己だった。

「げ……っ」

たまたまシシイと目のあつた克己はあからさまに眉をひそめて低い声を上げた。おやおやと店主はくすくす笑いを立てたがそれに二人が気がつくはずもなかった。

「何よ、貴方何持つてるの？」

「早く帰れよ」

「こら、克己くん。お客さんですよ」

たじつと後退し入ってきたドアを背に押し付けた克己は、店主の言葉に苦い顔をした。暫くシシイと克己の睨み合いが続いた後、ふんつとシシイが顔を先に逸らして椅子からひよいと飛び降りた。そしてそのまま入ってきたときと同じように扉へと向かった。

カランカラン…扉の前でシシイが立ち止まるとタイミングよく開かれる。シシイが上りを見上げると優が人の良さそうな顔で扉を支えていた。

「ごめんね、シシイちゃん。克己は今飛べない鳥を困らせていてね。その子が吃驚してはいけないと思ったんだよ」

優の台詞にシシイは籠を置くと、ふるふると首を振り……

「なあ……っ」

一声あげた。

そして、すいっと優の足元に身体を擦り付けたあと置いた籠を銜え

て表通りへと姿を消した。

「気にしてないってさ」

ぱたんつと扉を閉めて振り返り様そうついた優に克己は「ホントかよ」と眉を顰める。

「克己くん。彼女はおお客様ですよ。あまり失礼なことはよろしくないですね」

「はあ………すみません。でも、彼女って……」

猫でしょ？と続けて肩を竦めた克己に優はころころと楽しそうに笑い、店主は「それでもです」と釘をさした。

第3話：火種を持つ男

あいつは今日も遅れてくる。

苛立たしげに何度も俺は時計に視線を送った。手首の上で就職祝いにもらったデジタル時計と店内にかかっている古臭い柱時計の両方だ。

一人で入ったカフェは何だか落ち着かない。俺だけが場違いなところに足を踏み入れているようだ。

大体なんでこんなところを待ち合わせにしたんだ。

雨だつて降ってないし。

卓上をこつこつと叩いていた手を止めると替わりに煙草の箱を手にとった。

……あれ？

「どっぞ」

確かに持ってきたと思っていたのになかなか出てこない。ぽんぽんと自分の身体を叩き見当たらない物を探していた俺の視界の隅に、すつとマツチが写った。

顔をあげた先にはにっこりと穏やかな笑みを浮かべた店員がお盆を小脇に抱えたまま立っていた。

そして、俺がそれに気がついたのを確認してか軽く頭を下げて止めた足をカウンターへと進めた。

……どうも。

俺はその後姿に軽く礼を告げてありがたく手に取った。

店名の入ったケースを開き一本抜き出す。
しゅっと揺り合わせた先にはぼつと小さな灯が灯り火薬の臭いがぷんつと鼻先につく。

ちりちり……

煙草の先を焦がし紫煙が上がり始めると独特の香りが漂い始める。
俺はゆっくりと息を吸い込んで手元に津かづいてくる火種を見つめながら同じくらいゆっくりと吐き出した。
高く上っていく紫煙は、天井で音もなく回っているシーリングファンにかき回されその姿を散らしていった。
ぼんやりとその様子を眺めながら俺は一息ついた。
少しはその様子に落ち着きを取り戻したようだ。

まあ、怒るほどのことでもないか。

何か最近「程のこと」ではないことが年々増えているような気がするの俺の気のせいだろうか。
俺は本気になることがあるのか？ やや思案気に眉を寄せ煙草のフィルターをかみ締めた……が……。

ま、いいか。

結局いつもの結論に行き着いて嘆息する。

あいつ、今日は何て言い訳して来るつもりなんだろう……。
毎回遅刻してくるあいつの言い訳がほんの少し面白くて、ほんの少し楽しみになってしまうっている。

とはいえ、例えどんな理由があるにしろ連絡もなく遅刻するのは、やっぱり俺にとっては許すまじ行為で恥ずべきことだ。

だから、あいつが今回も遅れてくるだろうと予測をしながらも、い

つもどおりにその場所へと足を運ぶ。
まあ、別に「待つ」というのも悪くない。
どんなに遅れても必ず来るしな。
灰皿の中身が本数を増やす中、何本目かの煙草に火をつけたとき慌しくウエルカムベルが鳴り響いた。

やっときたか。

反射的にそう思って視線を入り口に移したが外れだった。
女には違いなかったが俺の待ち人ではなかった。
すらりと背の高い女だ。別段、美人というわけでも際立ってスタイルが良いわけでもない。店員はその女に個室席を薦めているようだったが彼女は首を縦には振らなかった。
結局、腰ほどまでのパーティションで仕切られたオープンスペースの一角に腰を据えた。
顔を上げた俺から斜め前に拝める位置だ。

何でそいつが底へ座ったのか些か気になるところだ。
俺なら壁で仕切ってくれている個室へ腰掛けたかった。だから自然と…

ああ「待ち合わせ」ってことかと判断した。

それにしても入り口に背を向けて座ったんじゃ意味ないだろう？別に話し相手でもないその駆け込み女に俺は何となく心の中で突っ込んだ。

「お注ぎしましょうか？」

ぼんやりとその客を眺めながら煙草をふかしていた俺に高い位置から声が降ってきた。

はたと我に返り声のした方へと顔をあげた。さっき女を案内していた飄々としていて掴み所のない案に何を考えているのか分かり辛い感じの店員だ。

俺が軽くうなずくと、につこりと微笑んで用意してきた新しいカップをことりとテーブルに置いた。柔らかな湯気と香りを漂わせる琥珀色の液体が真っ白なカップを静かに満たした。その代わりに空になっていたカップを盆の上に乗せ灰皿も新しい物と入れ替えてくれた。

「どうかされましたか？」

視線を店員に向けたまま外さなかつた俺に困つたように眉根を寄せて微笑むと柔らかい物腰手声をかけてきた。手際が良いな、とか、女みたいな手をしているな…とか、そんなことを考えていたはずなのに口から出たのは別の質問だった。

「何であの女あんなに慌ててたんだ？」

小声で呟いた俺に店員はちらと俺の斜め前に視線を泳がせた後、首を振る。

「私には何とも」

ま、当然の答えが返ってきた。

「何で個室は断つたんだろうな？」

「ああ、見てらしたんですね。どうも、独りになりたくなかったそうですよ？」

「ふー…ん」

…独り…ねえー…

それ以上俺の言葉が続かないのを確認して店員は軽く腰を折りその場を去っていった。

……ってことは俺が此処に座っているからあの女はそこへ座った、
ってことか。

何かそれって恥ずかしくないか？

ふとそんな考えが頭を過ぎって、肘をついていたほうの手で口元を覆った。それと同時に女と目があった。

俺は瞬間湯沸かし器になったようにぼつと方が高潮したのが分かった。慌てて視線を落とす。彼女は、その後も暫くこちらに視線を置いたようだが流れ落ちるように逸らして自分の手元に戻したようだった。

正直かなり驚いた。

あの女、別にそう大した美人でもないくせに丁寧に口紅を塗った口角を引き上げて愁いを帯びた微笑を見せた。とたん俺は射抜かれたようだった。

まだ、どきどきと煩い胸に手を置いて慌てて火をともした煙草の煙を深く、深く吸い込んだ。

「お待たせっ」

そんな最中、俺の待ち人が俺の顔を覗き込むようにして声をかけてきた。

俺は上手く吐ききれていなかった煙が違う器官に詰まって、大袈裟な位咳き込んだ。

「何、ぼさつとしてたの？」

「あー…別に。お前が遅いからだ」

眉間にしわを寄せてそう口にした俺を気にするでもなく

「へへっ、ごめんね」

と彼女はにこにこつと仔犬の様に笑いながら俺のむかいがわに腰を下ろした。タイミングよく水とお絞りが差し出される。

「ありがとう、マスター。えっと、私ミックスジュースね」

「はい、畏まりました」

店主だったのか。若そうだったから店員だと思った。

何となく二言三言言葉を交わした店主のその後姿を見送りながら俺は煙草を灰皿に押し付けた。

「禁煙するんじゃないの？」

「苛々すると欲しくなるんだ」

こんなに遅れてきたのに悪びれる風もない彼女にそっけなく答えた。

「あ、もしかして、怒っちゃってる？」

もしかしくなくても、普通は怒るだろう。

「ごめんね。道路に飛び出した子猫を救出に！と思って足を踏み出したらグレーチングに嵌っちゃって足ひねって病院運ばれたの」

おいおいおい。

ぼんぼんと軽快な口調でそこまで口にした一揆に口にした彼女に脱帽だ。

「今、疑ったでしょう！」

「あー…いや？」

それならそれで、電話の一本くらい入れたっていいはずだ。と、それをこいつに求めるのも今更という気がしないでもない。

そういう女だ。

見てみる！といわんばかりに彼女はテーブルの外へと足を放り投げた。確かに、巻かれたばかりのような綺麗な包帯が足首を包んでいた。だが、やはりそれで納得しろというのが無理だろう。俺はどうしようもない怒りとも呆れともつかない感情をはき捨てるように溜息をこぼした。

「心配？」

溜息が安堵の息にでも取れたのだろうか？どこまでもポジティブ思考な女で頭が下がる。

「あ？はいはい。心配心配。足引っ込めとけ、邪魔になる」

俺の適当な相槌に満足なのか、うふふつと笑って座り直すとお手拭のタオルをくるくると巻きもとの位置へ戻した。

結局は、こいつのペースだ。

それが俺にとって気に食わないような、それでもいいというような妙なもんだな。こんな女と俺は三年も付き合っている。俺がそんなことを考えているとも知らずに彼女は切々と如実にその時のことを物凄い大事件のように語っている。

その肩越しにちらと例の席へ視線を移したが女はこちらを気にもしていないかった。

当たり前か。

そのはずなのにどこかであの笑顔が俺の中に残って消化不良を起こしている。

「ほら、また」

再び煙草を取り出した俺の手から、ひよいと伸びた手が抜き取っていく。「んだよっ！」と睨み付けるとにこりと微笑まれてしまった。

「あたしが来たのに、苛々しくないでしょ？のーすもーきんぐ
OK?」

人の気も知らないで呑気なものだ。

「どうぞ」

たぶん会話を聞かれていたんだろう、マスターと呼ばれた男は笑いかみ殺しながら彼女の前にコースターを置き、そつと細長いグラスとストローを置いた。

「ねえ、マスター。この人これだけ？」

二、三本吸殻の入った灰皿を指差しながら楽しそうに聞いた彼女に、マスターは「ええ、そうですよ」と同意して微笑んだ。

「ほんとにいいー？」

かなり疑わしげにマスターと俺の顔を交互に見たが「ま、いっか」と口にしたのを確認して、マスターは席を外した。

「どうした？」

「んー。遅れたお詫びにどっちかあげようと思ったんだけど、決めかねているわけだ」

そういつた彼女は真剣にグラスに添えてあるバナナとチェリーを睨み付けていた。俺はわざとらしく長い溜息を付き大きく息を吸い込んだ後、声と共に吐き出した。

「いるか！そんなもん！」

「えーっ」

「……それなら両方くれ」

「やだ」

阿保だなこいつ

また、つまらない会話を交わしてしまったとテーブルに肘をつく。どっちもあげないわ！と怒りながら結局両方自分で食べてしまった彼女を眺めていると…ふと、視線を感じて顔を上げた。

……………っ

あの女とまた目があつた。今にも泣き出しそうに潤んだ瞳を向けながら、口元はさびしげに微笑んでいた。

もう駄目だ。

直感的にそう感じた俺は彼女の抗議の声も無視して、立ち上がって腕を引いた。

「出るぞ」

「え？まだ飲んでないよ」

「お前が遅れるからだ。早く出よう」

全部飲めなかつたよ、ごめんね。と彼女がマスターに詫びている声を聞きながら俺は会計を済ませて店を出た。

片足を引きずっていた。どうやら言い訳は本当だったようだ。俺は少し歩く速度を落とした。

「どうしたの？らしくない」

不安そうな声が隣から聞こえる。

「お前が遅れるのは”らしい”な」

「意地悪」

意地悪で結構だ。

何か、嫌な予感を起こさせる女だった。

すぎるような瞳に、何か囁きた気な口元。あのタイミングで彼女が

店に入ってきてくれたことに僅かながら感謝すらしていた。

そうでなければ、俺はきっと

火遊びが始まっていた。

「賢明ですよ」

彼女の謝罪にマスターがそう答えたのがやけに耳に残った。

第4話：運を拾う女

ついていない日というのはあるもので今日の私がまさにそれだった。

朝、目が覚めると飼っていた金魚がいなくなつて、探してたら時間ぎりぎり！慌てて家を出ると自転車を車でひかれて電車に乗り遅れた。

昼は学食で派手に転んで昼食はパー。極めつけは放課後大好きな彼の浮気現場を目撃。なんていうか、凄く凄くすごーくシヨックで。でも、悲しすぎてどれに重点を置いて悲しんだら良いのか良く分からなくなつてしまった。

きつと、金魚は隣のミケが食べてしまったのだらう。前々から狙っていたから。最近の猫はねずみもおいかけないというのに、どうして私の金魚なんかに目をつけたのか、不可解だ。

それに自転車、なんでよりも寄つて今日、あんな住宅街を大型車が走つたのか。修復するより断然新品になつた方が安く上がるだらう。でもあれ、私の初めてのバイト代で買ったんだよね。結構気に入っていたのに。

日替わりのランチだつて私の大好きなアジフライだった。

あいつのことも、好きだつたんだけどな……。誤解だなんていつてたけど誤解であれはないっしょ。

はあ……。つと、私は一つ溜息を落として、濃厚なキスシーンを思い出し眉を顰めた。イタリア人だつて通りすがりの女の子にあんなことしない。

「勝手な偏見ごめんなさい」

思わずイタリアの方に謝つてみた。

「は？」

つい、いつものお祈り癖で両手を組んで神に謝罪した私にまさかの返事があるとは思わなかった。

「あつと……す、すみません。何でもないんです」

言い訳も別な話題も思い浮かばずに私は目の前にティーカップを置いてくれた店員にとりあえず謝罪した。多分、置いたのとはほぼ同時にだったのだろう。
切れ長の瞳を僅かに見開いて驚いた表情をしていた。

「こんなところにカフェがあるなんて私知りませんでした」

僅かな沈黙に耐えられず、私は口を開いた。

店員はそんな私の心の動揺を悟ってか、くすりつと頬を緩めると軽く頷いた。

「そうですね。とても辺鄙なところなので、お客様みたいな方が多いですよ」

辺鄙。そういった店員の言葉は今一頷けない。私が寝ながら歩いていたわけであれば表通りに面していたような気がする。でも……でも、確かに私は今までここに気がつかなかった。

「私、みたいなの？」

「ええ、お一人の方が」

「それだけ？」

若干彼が口籠ったような気がして私は悪戯に瞳を細めた。

「……失礼ながら、お疲れのようでしたから」

「庭、綺麗ですね」

彼の気遣わしげな台詞は無視してそう呟いた私に、同じように庭へと視線を投げた彼は「好きなように生えるままです」と口にした割にうれしそうだった。

確かに彼の言うとおり統一感のない木々はそのまま……という感じではあったが、その奔放さがガラス一枚に隔てられた庭を別世界のよう映した。

「スプーンおかりしますね」

庭を眺めてぼんやりとしたままだった私を現実に引き戻したのはそんな一言だった。私とその問いに頷くと彼はソーサーに乗っていた銀のスプーンに、エプロンのポケットから取り出した小瓶の中身をつつつと垂らした。

「お酒？」

「ブランデーです」

ミニボトルのラベルを私が目で追うと、彼は二本の指でボトルを支えたまま小器用にポケットからライターを取り出した。そして代わりにボトルをポケットに滑らせて、ぽつと火を灯しスプーンに近づける。

「綺麗ですね」

「香りだけいただきましたしょう」

ゆらゆらと揺れる炎はとても美しく冷え切った心を満たしていくような気がした。ともすればそれははかなくも消えてゆき物悲しく感じてかすかに眉を顰める。

消えてゆく炎を追いかけるように、あ……と思わず漏らした声に彼は微笑み、そのままスプーンをゆっくりと薄い白磁器のカップに沈める。

「……………いい香り」

スプーンがソーサーに戻ると同時に私はカップを両手で包むように持ち上げていた。

甘く深い香りがふわりと鼻先を擦っていく。その様子に彼は小さく頷いてカウンターへと戻っていった。その後姿を見送って、私は深く椅子に腰掛けなおす。

香りだけ……………か。

私は何となく繰り返して、そつと薄いカップの淵に唇を添える。

「……………美味しい……………」

目に見える全ての事が上手くいかなくても、何か一つ上手くいけばそれでいい……………のかもしれない。ものは取りよう。金魚は明日も知れない命だったのかもしれないし、自転車だって買い替えの時期だったのかもしれない。何より、私ごと巻き込まれなかっただけマシだ。ランチのフライはあたりだったのかもしれない。

……………それから

目撃しなければ、私はあいつの浮気性を見抜けなかったかもしれない。それにああいうことは大抵ばれるものだ。早くてよかった。

「馬鹿だな。私」

ぼちゃん……っと飴色のカップの表面が揺れた。

……ああ

やっぱり、私はこれが一番きつかったのか。肘をテーブルにつき両手を組んで額に押し付けた。

木目調のテーブルが、ぼっぼっ……っと濡れていく。

今日、唯一上手くいったことといえば、こうして泣く場所を見つけることが出来たことだろうか？

第5話：雨を好む女

カランカランカラン

扉のベルが慌しい音を立てる。

店員も店内にいた僅かな客も、何事かと扉へ顔を向けたが客の興味はすぐに雨に打たれた女性だと判明して逃れてしまった。

「酷い雨ですね」

優が雨の中、かさもささずに歩いてきたのだろう彼女にそつと夕オ
ルを差し出した。

彼女は頬にかかる髪を邪魔臭そうに脇へ流すと短く礼を告げて夕オ
ルを受け取る。空調の風が直接当たらない窓側の席を案内されて素
直に従った女は静かに腰掛けてぼんやりと雨にぬれる庭の木々に瞳
を細めた。

「雨ね」

「そうですね。お好きなんですか？」

十人が十人晴れが好きなわけではないだろう。おそらく曇りや雪が
好きだというものもある。雨が好きだというものがいたっておかし
くはない。

暖かなお絞りで両手を暖めながら女は顔を外に向けたまま頷いた。

「好き。音が良いわ。それに濡れた空気も好きだし、木々が歓喜
の声を上げているような気もするでしょう？」

ふふ…と微笑みながら女がそういうと本当に庭の木々が慶びに歌でも歌っているように見えるから不思議だ。

「そう、ですね」

「それにね、一番好きなところは、必ず止むこと…かしら？それって、幸せや不幸に似ていると思わない？」

決して永遠には続かない。

言った後、女はその時初めて気がついたように「ああ、注文ね」と苦笑して何か暖かい物を…とだけ続けた。

不変のものほど退屈で生きながら人を殺せる物はない。規則正しい音を響かせて地面を濡らしていく雨粒にうつとりと瞼を落とす。静かに何かを考える時には絶好のBGM…目障りだと罵倒されたこと、愛していると囁かれた時間、繋いだ指先から伝わる鼓動…重ねた肌から体温が失われていく間、さよならと短い言葉が耳に届く。

「……………もう、あがるのかしら？」

「明日は晴れるそうですよ」

店主の言葉に女は「そう…」と頷いて口角を引き上げた。

ラインストーンで綺麗に飾られた美しい爪を、運ばれてきたカップに添えてかちやりと軽い音を立てる。

「止むのね」

美しく微笑んでそう呟いた女の頬に

つつ……………

と一筋の軌跡が描かれてカップの中身が小さく弾けた。

第6話：願う少女

「あなたは魔法使い？」

あまりに突然の質問だ。少女はカウンターの丸椅子に腰掛けてステツプに届かない足をぶらぶらとさせる。

小動物のようなまん丸の大きな瞳は真っ直ぐにカウンターの内側で小さなお客の為にミルクパンを火にかける店主に注がれている。

「そう、思いますか？」

店主は質問に質問で返すのは失礼かとも思ったが、何分幼い子供の反応は奇抜で面白い。

つい、という感覚で尋ね返していた。ふわふわと左右に散った愛らしい癖っ毛まで一緒に思案中のようだ。そして、うーんと唸った後恐々頷いた。

「この間此処でフォーチュンクッキーをいただきました」

歳の割りに丁寧な物言いだ。

店主はその答えに優がキツチンで小さな紙をせっせと作っていたのを思い出して、あれかな？などと納得する。

「あの占い凄く良く当たるんです」

だとすれば、魔法使いは製作者である優だろう。店主は少女の話に頷きながら十分に温まったミルクをカフェオレボウルの中に、点てたばかりの珈琲と同時に注ぎ入れた。珈琲の苦味のある香りがミルクと混ざり合い丸い香りに変わってふわりと立ち昇る。

「最初は”嬉しい便りがある”って書いてありました。そうしたら、わたしお受験の合格通知が届きました」

それはおめでとうございます。当然の祝辞を添えて少女の前にカフェオレをそつと置いた。少女はありがとうと小さく礼を告げたがそれはカフェオレに対してか店主が口にした言葉へのものかは図りかねた。

「その次は”赤がラツキーカラー”だと書かれていました」

……内容に統一性はないのだろうか？

細かな作業を好んでやる割には大雑把なところがあるものだ。

「そうしたらパパが赤いかばんを買って帰ってくれました」

角砂糖を4つ落として、くるくるとスプーンをカップの中で躍らせながら少女は嬉しそうに頬を桃色に染めた。その後もいくつか当たつたらしいが最後の2つのうち1つ……と言ったところでそれまで軽快に話を進めていたトーンが下がった。

「何と書いてあつたんですか？」

「”ハズレ”です。そう、書いてありました」

店主はネタが尽きたのだらうと心内で苦笑したが、少女の沈み具合に表情には出せなかった。少女は深い、深い溜息を落とし逡巡した後ゆっくりと慎重に口を開いた。

「その日、みんながばらばらに暮らすことが決まりました」

大抵のことでは動じない店主もこれには少し息を呑み「ばらばら？」と問い返していた。少女は甘めに仕上げたカフェオレを両手で包み込むように持ち上げてこくんつと一口喉の奥へ流しいれる。

「わたしは遠くの学園に入りますし、全寮制ですから。パパは、お仕事の都合で外国へ行くのだと言いました。みんな好きなことが出来るのだから幸せなのだ、ママが言ったから、本当はハズレじゃないんです」

そう教えられたのだろうが、まだ幼い子供にはその現実はまだまさに「ハズレ」でしかないのだろう。

「ママは本当はパパと一緒に居たいのに、わたしがいけないから我慢してるんです。ママはどこへも行かずにパパと私の帰りを待っているのが幸せだからって言ったけど……でも……」

私が居なければママはパパとずっと一緒なのに……そう消えそうな声で締めくくって、はあ……と嘆息した少女は「あ、そうでした」突然何か思い出したように声をあげた。

「これ」

肩から斜めに掛けていたポシェットの中から小さな包みを取り出しカウンターに乗せると丁寧に包んでいた包みをそつと開いた。ころん…と栗のような形をしたクッキーが気遣わしげに顔を覗かせていた。

「最後の一つ。また、ハズレだったらどうしよう」

少女の長い睫毛は今にも瞳から零れ落ちそうな涙で濡れていた。そして、少女は小さな両手で大切そうにクッキーを掬い上げるとそのまま店主へと差し出した。

「だから魔法を掛けてください」

真摯な瞳は本気で店主を魔法使いだと思っているのだろう。今の彼女にそれが本当に出来る出来ないはあまり問題ではない。店主は困ったように微笑んだ後、幼い手のひらに乗ったクッキーを摘み上げた。

そして、やや思案した後、ころんと手のひらの上で転げたクッキーを見つめてぼつり

「私に譲ってもらえませんか？」

「え？」

店主の台詞に虚を付かれた少女は浮かんだ涙も引つ込めてきよとんとしている。

「で、でも、よく当たるんです。それに、良いことばかりじゃないんです」

「構いませんよ。私は魔法使いですから、今ここでこれを割つてよいことなら貴方に分けてあげましょう。悪い結果でも私なら平気です。怖くありませんよ」

幼いながら他人の心配まで出来る少女はよほど暖かい家庭で慈しまれ育つたのだろう。

「幸せならおじさまのものです」

「違いますよ。幸せは分け合うものです」

申し訳なさそうな少女に店主はにっこりと微笑んでそういうと、躊躇なくパキンッとクッキーを二つに割った。中央からころんと丸められた紙が転がって出てくる。対峙した少女の小さな喉がごくんと鳴った。

「カフェオレと一緒にどうぞ」

店主は中身だけを抜いて、少女のソーサーの上に割ったクッキーの半分を乗せて、もう半分は自分の口内へと納めた。

少女は店主の手の中の紙が気になっていたようだが言われたとおりにクッキーを頬張りカフェオレで流し込んだ。

「美味しい……です」

「それは良かった」

少女の感想ににっこりと笑みを作った店主は「それでは……」と、手の中に残っていた小さな紙を開きに掛かった。

…カランカラン…

形の良い爪が紙の端に掛かったのとほぼ同時に入り口のウェルカムベルが忙しない音を立てて扉が開いた。

店主とその手元に釘付けになっていた少女も音のしたほうへと顔を向ける。

「いらっしやませ」

お決まりの文句で裏から出てきた優の前をすっと通り過ぎたのはまだ若い女性だった。女性はカツカツとヒールの音を響かせてカウン

ターへ真っ直ぐに歩み寄ってくる。
その瞳は一箇所しか見ていなかった。

「ママ」

「麻衣ちゃん。お稽古から戻らないから心配したわ。寄り道は駄目よ」

物腰の非常に穏やかな女性の為か叱っているのだらうけれど厳しさには掛けているように見える。しかし、麻衣と呼ばれた少女は素直に「ごめんなさい」と謝罪した。そんな我が子に「いいのよ」と添えて頭を撫でた後話しを続ける。

「ママね。麻衣ちゃんにお話したいことがあるの…あ、すみません」

立ったまま話をしていた母親はその様子を見ていた店主に軽く頭を下げた後麻衣の隣に腰掛けて「珈琲を」を添える。

店主はそのままになった紙片をカウンターのの上に置き頷いてサイフオンの準備をする。

「ママ。お話って何？」

「……ママね。麻衣ちゃんに謝らなくちゃいけないの」

カウンターの椅子を回して娘の座った椅子も自分の方へと向けて支えた彼女は、不思議そうな娘の瞳を真っ直ぐに見つめて話を続ける。

「麻衣ちゃんがとっても頑張ったのママ良く分かってるわ。一緒に頑張ったものね」

「うん」

「ママね、本当に嬉しかったの。でも、でもね。ごめんね麻衣ち

やん」

「なーに？ママ、ごめんなさいするのは悪いことした時だけだよ。どうして麻衣にごめんなさいするの？ママ悪いことしたの？」

幼い子供の問いかけに、母親は眉を寄せて頬を染め頷いた。なーに？と繰り返した麻衣に彼女は意を決したようにもう一度頷いて大きく息をついた。

「やめたのよ。麻衣」

「え？」

「麻衣をあの学校へ通わせるのを」

客の話に耳を敬てるつもりはないが目の前で成されれば嫌でも耳に届く。店主は二人の様子を見守りつつカップを琥珀色の液体で満たした。

「これは、ママの我俣なのは分かってるわ。でも、でもね」

頑張った娘の成果を取り上げることへの罪悪感が拭えない。苦悶に満ちたその表情に息が詰まる……。

「ママ……ママー！じゃあ！じゃあ！一緒なの？ねえ、一緒？」

「え？」

予想外に子供の喜色の声に母親は目を丸くした。

まどろっこしい母の謝罪をさえぎって堰きつくように瞳を輝かせて問い返す。

「ママと一緒に？パパと一緒に？」

「え、ええ、一緒よ。ママやっぱり一緒にいたい……麻衣とも

……もちろんパパとも」

申し訳なさそうに口にする母とは対照的に舞いは喜色満面で両手を挙げた。

「帰ろう！ママ」

歡喜に満ちた声色でそう告げた麻衣は身軽に椅子から飛び降りると母親の腕を引っ張った。

「構いませんよ」

その腕に従うように腰を上げたが思い出したように店主を見た彼女に店主は苦笑して頷いた。彼女はもともと腰の低い性分なのだろう。深々と頭を下げて急かされる様に娘に続いた。

「魔法使いのおじさま、ありがとうございます！」

しまりかけた扉の向こうから明るい声が響いた。ベルの音が鳴り止むまで見送って、店主は一息つく。

「マスター……魔法使いだったんですか？」

「さあ、どうでしょうね」

飲む相手の居なくなった珈琲を口元に運びながら、カウンターの上で丸まった紙を押し開く。

”願いは叶う”

第7話：チョコレート記念日

空は高く青い、天気は上々。

暑くもなく寒くもない。実に過ごしやすい季節だ。ドアに掛かったプレートを”open”表示に返し定時に店を開ける。

準備は万端

ただいつもとちょっと違うのは店主が不在だということだった。

「あれは何か抱えてるよな」

「え？ああ。そう、かもねえー」

今日の手作りシフォンケーキは抹茶だ。庭の緑を見ていると何となくそんな気になった。優はカウンターに寄りかかり店内を眺めていた克己の前をさらりと通り過ぎ、綺麗に焼きあがったシフォンケーキをショーケースにディスプレイして頷いた。

店主不在の店内は、差し歯が取れたように何か足りないような気がした。

留守を任された二人は普段と変わりなく客を出迎えたが、正直一人客がなるべく来ないように願っていた。

しかし、その願い空しくオーブンテラスに座った一人の女性。時折木の天辺を青いではうつむいて溜息を漏らす。そんなことを一時間以上も一人で繰り返しているのだから気にならないという方が嘘になる。

もともと此処へ来る一人客の殆どがあんな感じなのはいつものことだ。そういう人間がまるで道に迷った先にやっと見つけたとばかりにふらりとここへ足を向ける。

でも、いつもなら店主がいるのだ。

「マスターだったら絶対声かけるよな」

「だろうね。ほら、気になるなら何か言ってきなよ」

「俺に振るなよ」

「僕が見つけたわけじゃないし、僕はそんなに気にならない」

そういつてにつこりと毒のない笑顔を浮かべ、ぽんつと克己の肩を叩いてさっさと裏へと引っ込んでいった優を「冷たい奴」と小声でぼやきながら恨めしげに見送った。

「僕は冷たいんじゃないよ、分を弁えてるだけだよ。気まぐれでするようなことでもない」

地獄耳なのか違う？と釘を刺した彼に他意はない。克己はぶすつとしたまま両肘をカウンターにつき顎を乗せた。結局彷徨う視線が行きつく先は彼女の元だ。

あ、ハンカチ出した。

あちゃー、泣いてるんじゃない？

何があっただら？ん？携帯見てる。実は待ち合わせだったのか。

彼女の動きに合わせて眉間を寄せたり離したりしている克己の背後から”ばこん！”と軽い音が響いた。

「いてっ！」

「鬱陶しいっ！声かけるつもり無いならさっさと仕事して！」

優に叱咤された克己は不服そうな表情をしたままお盆の裏で叩かれた頭を擦りつつ折った腰を伸ばした。それとほぼ同時に入ってきた

客の為、メニューとお水・お絞りが人数分乗せられたお盆を優から受け取る。
テーブルへと歩みを進めながらもちらと例の場所に視線を送ったが相変わらずな調子だった。

……ふう

と大きな溜息をつき他の客の注文をとるが明らかに心此処にあらうだ。

「あの、聞いてます?」

「あ、すみません。大丈夫ですよ、ご注文繰り返させていただけます」

大丈夫と言っておきながらやはり上の空で聞き繰り返した注文は間違っていた。あはは…と情けなく笑うとカウンターで見ていた相方が渋い顔でにらんでいた。

仕方ないじゃないか。ここで、あんな顔されてたんじゃ…ったく、何でこんな日に限っていないんだよ。

ちえつと小さく舌打ちして注文を伝えにカウンターへと戻る。優に軽食を頼み自分は飲み物をとカウンターへ入る。

「ポケマスター」

ぼすっ

「いてっ!」

「誰がポケですか」

用事とやらから丁度今しがた戻ってきたらしい店主に書類ケースで頭を叩かれた。ちらちらとテラスの様子を伺いながらエスプレッソメーカーに気を取られていたら、愚痴が声になっっていることに気がつかなかった。

今日は厄日だ。思わずばやいた声に店主は「何ですか?」と問い返していたが克己は頭を左右に振った。もう一発は勘弁願いたい。

「ちゃんと留守番してきてくれましたか?」

「店番だろ?」

「どちらでも構いませんよ。似たようなものでしょう?お土産に生チョコレート買ってきたんですけど後でいただきませんか?」

にこりとそういつて笑った店主に克己は棘を抜かれた。だが、今はそれよりも。

裏へと引つ込もうとしていた店主の腕をぐいつと引つ張った。少し驚いた様に振り返られたがそんなことはどうでもいい。

克己は顎でテラスを杓った。

「気になるんなら克己が行けば良いんだよ、さつきから」

「煩いな」

店主の腕から書類ケースを受け取りつつ相方に悪態をつかれて「いっ!」と口を横へ歪める。その様子に店主は「また子供みたいなことを」と少々呆れたように微笑んで肩を竦めた。

「あれでも、寛いでいらっしやるのかも無理ないでしょう?」

テラスの女性をちらりと見た後、口ではそういいながら店主は上着を脱ぎ荷物に重ねるとカウンターの裏にかけてあったエプロンを身

に着ける。

そして、静かに彼女の元へ足を運んだ。その様子を少し緊張した面持ちで眺めている克己の様子に優は苦笑して肩を竦めた。

店主の片手には、土産だといっていた箱がそのままだ。克己は思わず、あ…と声を漏らしそうになったが何とか飲み込んだ。

ちよつと楽しみにしていたのに…。

そんな克己の心を知ってかしらさか彼女は店主が差し出した箱から一つ掴みあげるとにっこりと笑ったように見えた。やっと胸をなでおろす。

「今。内心ホツとしたらう？好きだもんね？チョコレート」

「してねえよっ」

相方の何か企んだような笑顔にへそを曲げてそっぽを向く。向いた先にはまた彼女が目に入ったが先ほどまでとは彼女を包む空気が変わっていたことに、やっぱりマスターは凄いなと改めて思った。

「はい、留守番お疲れ様」

カウンターへ戻ってきた店主にチョコレートの箱を渡されて条件反射で受け取った。

綺麗に並んだ黒曜石の様な菓子之列がたった一箇所だけ欠けていた。

その申し訳なさそうな一箇所で埋まる物があるなら…それで十分だろっ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0092m/>

Cafe*Noel

2011年2月5日16時31分発行